

かゑらんとかねて思へハ 梓弓

なき数に入る 名をぞとどむる

四條畷に散った若き武将、楠正行

楠正行通信 第140号

令和4年1月11日

発行＝四條畷楠正行の会

〒575-0021 四條畷市南野5丁目2番16号

四條畷市立教育文化センター内 072-878-0020

## 12/14 公開講座「楠正行の生涯を学ぶ」第4回

# 正行22歳、第2期戦乱の時代

## ＝ 隅田城の戦いから住吉天王寺の戦いまで破竹の快進撃 ＝

### ● 尊氏、天竜寺落慶を受け楠討伐に動く ●

公開講座の第4回は、正行、第2期戦乱の時代（正行22歳、四條畷のかさ田善弥）を取り上げます。

足利尊氏は、興国5年1344年、後醍醐天皇追善のため天竜寺を落慶、翌年8月供養式典を終えますと、いよいよ楠討伐に向けて、興国6年4月、佐々木堂譽に河内の国甲斐庄の地頭職を与え、正平元年1346年、足利直義は高野山金剛三昧院に河内の国岸和田荘を寄進するなど、正行への揺さぶり作戦を展開します。

一方、吉野朝廷でも奥州から逃げ帰った北畠親房の主戦論が動き出し、全国に向けて開戦令を発します。この頃、正行も高師泰邸や尊氏邸、更には直義邸への放火を仕掛けるなどの陽動作戦を展開しています。

そして、正平2年に入りますと、激突不可避の状況になります。

熊野水軍が九州吉野朝（懐良親王）加勢に動き、中・四国の海賊が集結、6月には薩摩宮軍に応援部隊を送り、薩摩津上陸作戦を敢行しています。

### ● 直義の南進令を皮切りに戦乱発端 ●

この年の8月9日、直義は、細川顕氏、畠山国清に命じて、南進・楠討伐令を発したことで、足利軍と楠軍の戦いの幕が切って落とされました。

正行は、直義の南進令の報を受け、直ちに行動を開始、翌10日には、足利に通じる隅田、後顧の憂いを断つべく隅田城を急襲し、1日で開城させます。この隅田城は、史実の上からは特定されていませんが、岩倉城や霜山城などの全体を指すものでないかと思われます。この隅田には、岩倉氏、葛原氏、下山氏などの合議体で城が守ら

れていたことから、謀報作戦によって彼らを懐柔、戦わずして無血開城させました。

続いて8月24日、天王寺に陣を進めた細川顕氏や佐々木氏頼らの配下300騎が池尻城に向かったため、正行は和田助氏や大塚惟正を率い出陣、敵兵を敗走させます。

9月9日の早朝、八尾城の攻防が始まります。細川顕氏、佐々木氏頼、赤松範輔、宇都宮貞綱らに対し、正行は、和田助氏、行忠、賢秀らを主力部隊に攻撃を加え、正午ごろには八尾城を落とします。

翌日の9月10日には、吉野の宮から「宮軍の出動を天下に知らせる」綸旨が、四條隆資から九州の阿蘇惟澄宛に発給されています。

9月17日、藤井寺の教興寺で細川顕氏と激戦を展開しますが、正行は山に放った多くの松明を背に夜襲作戦を敢行し、細川顕氏を破っています。この時、京都市中では「官方蜂起！」の報が出回りました。

正行は、打ち続く戦いで勝利を背景に、尊氏との和睦の思いを強めますが、幕府方は10月1日、援軍として山名時氏を河内東条に発向させています。

### ● 壮絶な放火作戦、住吉天王寺の戦い ●

第2期戦乱の時代のもっとも壮絶な戦いは、11月26日に行われた住吉天王寺の戦いでした。

尊氏が送り込んだ大手の細川顕氏は天王寺に、搦め手の山名時氏は住吉へ、陽動部隊の赤松勢は堺に、佐々木連合軍は阿倍野に陣を張り、合わせて5400騎でした。

正行は、大塚惟正、和田行忠、和田賢秀、安満了願、和田助氏ら1750騎、石津周辺から瓜生野にはなった放火作戦にまんまと引っ掛かり、敵は戦意喪失して天王寺を

めがけて退却をしたのです。

この時、大川にかかる渡辺橋では、我先に京へ逃げ帰ろうとする敵兵は全く統率が取れず、勢い多くの兵が大川に溺れることとなり、騒然となりました。正行は、「戦いをやめよ。溺れる兵を救え！」と敵兵を救出し、暖を取らせ、傷を癒し、衣服・武具を与え、京に送り返しました。この博愛精神にあふれる正行の行いは、渡辺橋の美談として、今も語り継がれています。また、この事績が紹介されることで、日本は国際赤十字に加盟ができたとの伝承が残っています。

この決定的な勝利で、正行は吉野朝の停戦＝和睦への動きを願いましたが、吉野朝廷は和睦に動かず、一方、尊氏は時を置かず、11月30日には、高師泰に正行追討を命じています。高師泰は、12月14日、京を発し淀に到着しています。

#### ● 四條畷の合戦前夜、正行の吉野詣で ●

正行、いよいよ和睦論を捨て覚悟の時が来たようです。12月12日付、大塚惟正が和田氏に宛てた書状に「あひかまえてかまえて、さとの人百姓なんとも、かいがいしく候はんみなみなめしぐせられ候べく候、御たてもあまたもたせ候べく候」と、里人や百姓など屈強なものを根こそぎ動員し、縦などの防具も沢山持たせて集めるようにと、檄を飛ばしています。

12月26日、高師直が山城の国八幡に着陣すると、破竹の快進撃をした正行でしたが、和睦の道の困難さを痛感しながら、吉野朝と北朝の一大決戦を覚悟し、吉野に詣でました。

12月27日、吉野行在所を訪れた正行は、「正行・正時すでに壮年に及び候ひぬ。この度われと手を砕き合戦つかまつり候はずは、かつうは亡父の申し遺言に違ひ、かつうは武略の言ふかひ無き謗(そし)りに落つべく覚え候ふ。」と別れの挨拶をすると、後村上天皇は、「此度の合戦天下の安否たるべし。進退(軍勢の進退)度に当たり、反化(戦術の変化)機に應ずる事は、勇士の心とするところなれば、今度の合戦手(わが命令)を下すべきに非ずと言えども、進むべきを知って進むは、時を失はざらんがためなり。退くべきを見て退くは、しりへ(後方:後の勝利)を全うせんがためなり。朕なんぢを以って股肱(最も信頼する家臣)とす。謹んで命を全うすべし。」と、正行に決して死ぬな！と説諭しました。

正行は、後醍醐天皇塔尾陵に参った後、如意輪寺本堂に行き、過去帳に同道した143名の武将の名前を書き連ねた後、辞世の歌と文章を遺しています。

「各留半座乗花臺 待我閻浮同行人 ききたばおくる人き  
侍らやせん ひとつ蓮のうらを残して 願以此功德平等施一切  
同發菩提心往生安樂國」(文意:人間は死んだら蓮の台に座るが、私が先に来ても半分開けて待っているよ。同じ志をもって生きてきた仲間だから)

この辞世の文章は、宗教に通じ、文学にも通じる教養人としての正行がにじみ出ています。

有名な辞世の歌は、「かゑらしとかねておもへし様も なき敷に入る名をぞとどむる」ですが、吉野朝の総大将たりえなかった正行の悲劇がふつふつと伝わって来ます。

楠木氏三代の著者、井之元春義は“(北畠親房から)「お前は何をぐずぐずしているのか。そんなことではあなたの父正成の、湊川での忠節を無にすることになるのではないか」と厳しい叱責の言葉があったのだろう。公家の威厳を笠に着た、尊大で峻烈な言葉に、身分の低い武将正行は楠家の棟梁としての誇りを傷つけられ、怒りと恥辱に唇を噛んだに違いない”と、正行の心情を分析しています。

この歌の大意は、こたひの合戦は生きて帰れぬ身であると思っているので、死者の数の中に入るわが名を書きとどめて出発する、です。なお、辞世の歌の「かゑらしと」の「へ」を「ゑ」と綴り、「おもへし」と助詞にカタカナを使うのは、南北朝期特有の使い方、室町以降の書体ではないと、久曾神(当時、愛知大学)教授はこの筆跡は本物と断定しました。

過去帳に残された文といい、板塀に刻まれたこの辞世の歌といい、往生すれば行業等を詳述されるのが過去帳の原則であったと思われるこの時代に。続往生伝」奥書の「唯願此伝血縁人。各留半座乗花葉 待我閻浮血縁人」とも重なる言葉を過去帳に記した正行は、この「続往生伝」にも通じて

いた学識者としての像が浮かび上がってきます。そして、一蓮托生義にかかわる慣用表現を過去帳に記すことで、義を貫いて生き抜いた正行が、どれほどに無念の中で死を決し、後に残る者にその義を託そうとしたか、この二つの言葉から切々と伝わってくるのではないのでしょうか。「義」に生きるとは、正しいと信じることのため、道理を重んじて事を決し、そこに躊躇やためらいがあつてはならない。武士は、死すべき時に死し、討つべき時に討つべし。父の遺訓を護り、桜井から湊川に下向した父、正成の最期に重ねるように、正行は、吉野を出で、四條畷に向かったのです。

(文責: 四條畷楠正行の会代表 扇谷昭)

